

コロナ禍で地域のつながりをつくる活動の多くが休止していました。その間に、活動を支えてきた住民自身の健康状態が低下して活動が中断してしまったり、次世代に活動内容が引き継がれないという課題が生まれました。一方で、感染対策を行いながら、どのように継続していくか悩みながら活動を模索する姿も見られました。このような経験を通して、地域でつながることの大切さを実感できることが、どのような社会状況になっても継続していける地域づくりを進める力になります。

住民同士がつながり、助け合える地域にしていくためには、日頃からお互いに顔の見える関係を築くことが大切です。住民同士が自然に助け合える、協力し合える関係づくりを広げるとは、災害などの非常時にも強い地域をつくることになります。

年齢や障がいの有無、国籍などに関わらず、一人ひとりの住民がお互いを尊重し、活躍の場を持って暮らせることが大切です。また、核家族化や少子高齢化による家族機能の低下、地域での人間関係の希薄化などにより、家庭や地域の“子育て力”が低下していると言われています。将来を担う子どもたちは地域の宝です。すべての子どもが、より豊かに育っていけるように地域全体で子どもを育てましょう。

1. 仲間づくり活動・居場所づくり活動（サロン活動）の拡充

【仲間づくり活動】

緩やかなルールのもと、気軽に集まり、軽体操・講話・レクリエーション・食事・ボランティア活動等のプログラムを定期的（週1回～月1回）に実施する。

【居場所づくり活動】

集会場等を開放し、好きな時に、好きな時間、好きなことをして過ごせる場所を提供する。

○身近な地域でのつながりをつくり、何かあったときに頼ったり、助け合ったりできる関係をつくる場です。コロナ禍で、人と人とのふれあいが制限されたことで、改めてつながることの大切さが確認されました。

○いくつになっても、一人ひとりが地域で活躍の場を持って暮らせる地域をつくりましょう。それぞれの集まりの中で、自分たちが楽しく続けられる手づくりの活動を楽しみましょう。

★活動の効果

- ・活動に参加することでお互いの様子を知ることができ、安否確認や生活の困りごとを把握する機会にもなります。
- ・閉じこもり解消や健康維持・向上による介護予防、認知症予防などの効果も期待できます。

★楽しく活動を継続していくポイント

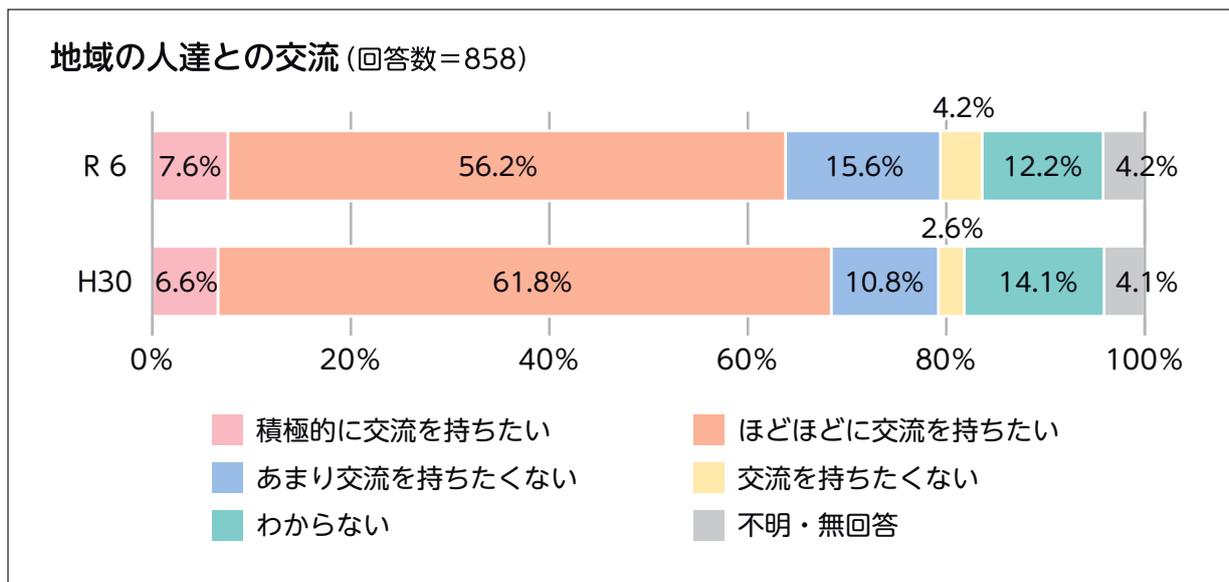
- ・参加者や地域住民の特技や専門知識を活用して、いろいろなイベントを企画してみましょう。(料理教室、史跡巡り、子どもたちとのボードゲーム遊びなど)
- ・ボランティア活動や食事会、スポーツ活動など、特定の内容に偏らず、参加者の趣味や興味関心があるいろいろなメニューを入口にして、活動への参加を促しましょう。
- ・地域の自由な活動です。自分たちが「やりたい!」と思うことをやってみましょう。
- ・デイサービスなどを利用するようになって、地域とのつながりを保つために、仲間づくり活動等への継続した参加を呼びかけましょう。

○誰もが参加しやすい集まりにするためには、「歩いて気軽にいける範囲」に活動の拠点があることが大切です。公民館や自治会の集会場だけでなく、利用可能な施設等を交流の場として活用し、参加者の輪を広げましょう。

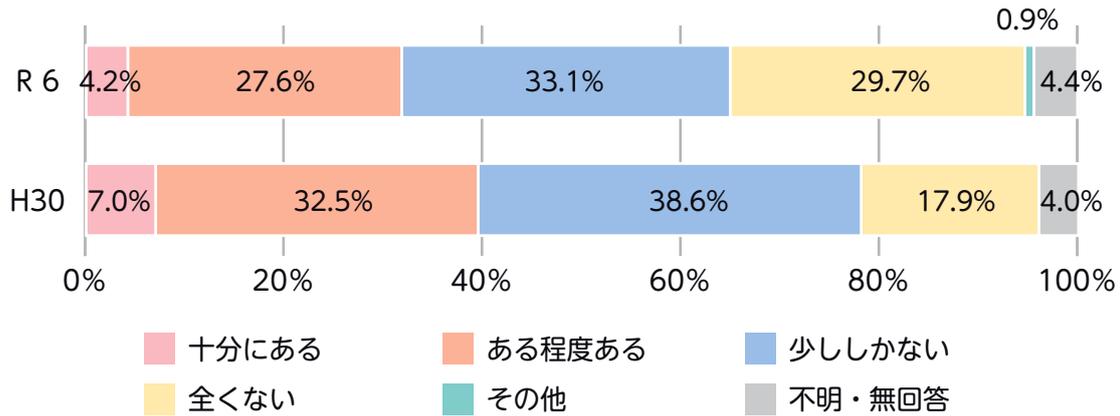
○活動を行う住民自身が楽しむことができる場にしましょう。また、それぞれに役割があると、活動への意欲や介護予防にもつながります。運営側・参加側に分かれず、それぞれが小さな役割を持ち、参加する人みんなが活躍できる場にしましょう。

2. 世代間交流・多文化交流の実施

○市民アンケートによると、地域の人たちと「積極的に交流を持ちたい」「ほどほどに交流を持ちたい」と思う人が6割を超えています。一方で、他の世代との交流機会が「十分にある」「ある程度ある」人は3割程度となっています。誰もが気軽に参加・交流できる機会をつくり、地域住民による世代間交流を進めることで地域に一体感を生み、活気あるまちづくりをめざしましょう。



他の世代との交流機会 (回答数=858)



○子どもたちが主役になれるような楽しい行事を実施して、地域住民と子どもたちとの交流の機会をつくりましょう。子どもを介して親世代と地域の接点をつくり、地域の魅力を知ってもらうことで、積極的に地域の活動に参加してもらいましょう。

★世代間交流の取り組み (例)

- ・世代が異なる団体（子ども会・老人クラブ等）が合同で行事を開催して交流を図ることで、世代間の理解を深める。
- ・仲間づくり活動や居場所づくり活動を活用して、子どもたちと高齢者が一緒にふれあえる場をつくる。
- ・子どもたちが積極的に地域の活動に参加しやすいように、学校に協力してもらって子どもたちに行事などの情報を案内してもらう。
- ・地域住民が持っている専門知識などを活かしたイベントや講習会など、地域で気軽に参加できるような「楽しい小さなイベント」を行うことで、普段地域の活動に参加していない人との関係ができる機会をつくる。

○技能実習などにより、外国にルーツを持つ住民も増えています。互いに顔の見える関係をつくり、それぞれの文化を尊重して暮らしていける地域をつくりましょう。

★多文化交流の取り組み (例)

- ・技能実習生のいる企業や福祉施設を接点としてイベントなどを通じた交流の機会をつくる。
- ・学校の外国語指導助手（ALT）を地域の行事に招待したり、研修会の講師として多文化を紹介してもらう。



3. 子育てを応援する地域づくり

- 核家族化が進み、子育ての不安や悩みなどを相談できる場や、子どもが色々な大人と関わる機会が減っています。親や子どもが参加できる場所や、地域住民が地域の子どもの育つ力を応援できるような取り組みを進めましょう。（例：子育てサークル、子ども食堂等）
- 地域の子どもたちの安全を、地域みんなで守りましょう。登下校時のあいさつ運動や見守り等は地域の防犯力を上げることにもつながります。また、子どもたちと顔見知りの関係をつくり、地域が一体となって子どもを育てる環境をつくりましょう。
- 民生児童委員は地域における相談・支援のボランティアです。子どもや子育てに関する支援を専門に担当する主任児童委員も活動しています。市民アンケートによると、40歳未満で民生児童委員を「知っている」と答えた人は全体の約4分の1となっています。子どもや子育て中の親が、自分から民生児童委員等につながる事が難しいと推測されます。民生児童委員活動のPRはもちろん、周囲の人が関心を持ち、“様子がおかしいな”と感じる子どもがいた場合は、担当の民生児童委員や主任児童委員に相談することも必要です。

4. 防災を通じたつながりづくり

- 防災は、地域住民の誰もが関心を持ちやすいテーマです。大きな災害が起きたとき、避難時や避難所での生活において、隣近所で助け合うことが不可欠です。そのためにも日頃からつながりをつくり、信頼関係を深めておくことが重要です。防災を通じて地域のつながりをつくりましょう。
- 大規模災害時は、多くの人々が心理的に不安定な状態になります。年齢、障がいの有無、国籍に関わらず、日頃から顔の見える関係をつくり、顔見知りを増やすことで、災害時に少しでも安心して生活できる環境になります。
- それぞれの文化や特性、配慮が必要なことを知ることで、災害時に「誰が何に困るか」「どういった手助けが必要になるか」「事前に地域で取り組めることは何か」などを、みんなで考え、理解しあえる機会を設けましょう。
- 災害は人を選びません。自治会加入の有無に関わらず、みんなで防災について考えましょう。

市社協が取り組むこと

- ・ 平時から災害に対する意識を持ってもらうため、災害ボランティアセンターの取り組みに関することや、被災地支援での経験談などを地域で説明する機会を設けます。